

第124回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2020年1月13日 (月) 14時～17時

兼題「氷柱 (つらら)」

- 川井素山 ○江戸前の銀鱗はねる漁始
一瀑を占むる氷柱の銀屏風
巨木林抜けて寒禽鋭き一声
鱈酒にほろ酔ふ連れに肩を貸す
- 保井寶正 ○独楽のごと柚子湯の柚子を廻しけり
受け継ぎし朱塗りの盃の屠蘇祝ひ
かの人の安否知りたき賀状かな
氷柱やあまだれとなす三千院
- 佐久間喬 ○令和の子一人加ふる祝箸
山里に人住む庵つらら伸ぶ
年玉の手触り硬く中覗く
テレビゲームかくもにぎやか三が日
- 丸山酔宵子 ○湯豆腐や拍子木の音遠ざかり
軒つらら零こぼれて陽をはじく
寒月や下駄の音響く石畳み
風抜けて首をすくわる冬木立
- 吉田啓悟 ○バシバシと警策の音氷柱落つ
室生寺を寄添ひ歩く時雨かな
興福寺うれふる阿修羅冬木立
柿吊るす姉さん被り法隆寺
- 青木英林 ○期末試験オリオンおわす夜空には
つらら手にチャンバラをするチビっ子ら
煮凝りや厨の隅に見ついたり
蕎麦搔きを出す店多し信州路
- 山本草風 暁闇を白く染めゆく淑気かな
大掃除子供ばかりの母の手記
大氷柱星の子孕みひかり生む
初富士や街の風呂屋の長談義
- 渡辺鯨波 ○恙なく平凡に生き根深汁
軒氷柱ちびちびと飲むオンザロック
昨晚の嘘悔やみつつ氷柱薙ぐ
西口は薬局ばかり初景色

- 後藤克彦 ○冬帽子置きて予約の席とする
ヨタヨタと窓這い登る冬の蠅
カタカタと忙しき音や師走風
木琴に似るや不揃なる氷柱
- 永井正孝 ○年神とおかざり並ぶピアノうえ
初詣で噂話に年占なふ
普段閉ず門にも立てる松飾り
賀状一片故郷の友は元気なり
- 原 晶如 ○その声に元気をもらふ寒稽古
空の青透かし氷柱のしづく音
朝日浴び初湯で足のぐうちよきば
咳込んでやまぬ泪のひかりをり
- 佐久間たか子 ○昼暗き熊野中辺路風冴ゆる
一年を思いて活ける実千両
熊野路は心清めて冬の空
朝陽さしてクリスタルのごと氷柱かな
- 金森純女 ○初硯かほりしづかに部屋に満つ
ベランダに小鳥来りて年迎ふ
夕暮れに初富士ありて足を止め
つらら折りガリリとかじる少女かな
- 青葉ひかる ○突き刺して心の氷柱砕けよと
心の灯ゆらゆらと消えゆく日
憎しみの矢を受けて散る椿かな
実を切られ木枯らし刺さり夢いずこ

次回「萩句会」

日時 2020年2月10日（月）14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題『春光』一句

当季雑詠 三句